

シカゴ双葉会 通学の歴史

現在、シカゴ双葉会日本語学校では、補習校・全日校ともにバス通学が原則となっております。現在のような通学バスシステムが整備されるまでには、シカゴ補習校の創立時1966年以來の歴史があります。現在に至るまでの通学に関する変遷を記しご理解とご協力を得たいと思います。

1969年から1978年までの9年間、シカゴ補習校はロヨラ大学を借用し授業を行っていました。そこでの最大の懸案は通学問題でした。駐車場の確保・通学時の車の混雑は、現在でも補習校共通の悩みの種になっています。当時は朝夕の1時間、大学付近が児童生徒の通学のための自動車で埋めつくされ、周辺の道路が渋滞し身動きできない状況になっていたのです。地域住民からは「ジャパニーズ オン サタデー」と言われ、住民感情も悪化してきました。双葉会は、大学に図書や石灯籠の寄贈を行うなど、関係改善に必死の努力をしましたが、土曜日ごとに発生するパニック現象は、ますます住民感情を悪化させていったのです。

その頃生徒増による教室不足問題解消と全日校設置の気運が高まりました。その結果1978年9月にスコークーケントン校に移転し、大変な苦勞の結果全日校も発足させました。それを契機に住民との軋轢を解消する手立ての一つとして、自動車通学からバス通学に切り換えました。しかし、それでも学校周辺の住民からは決して快く迎えられたのではなく、移転後2年間ぐらいは窓ガラスを割られることが続くことがありました。

1984年、エマーソン校への移転時に発行された校報に、地域住民への配慮について次の様な一文が残されています。「誰も故郷を愛さない者はありません。故郷は思い出の泉であり、我が人生の確かめ場です。そのために、故郷が昔のままであってほしいという願いは、どの民族にも変わらない感情であろうと思います。ご承知のようにエマーソン校の南には、数十年を経た家々が立ち並んでいます。そこに居住する人々の目をもって日本語学校を見る時、それは経済侵略のシンボルとしか映らないでしょう。ある日突然、黒い目、黒い髪の大集団が入ってきた時の地域住民の戸惑い。一步間違えば、すぐに不快感に繋がります。そうしたことを十分思いやって、ごく自然になじんでいくようにしたいものです。」このように双葉会・学校・PTAの三者で、力を合わせて地域住民との協調と相互理解に努めた結果、軋轢は徐々に解消していったのです。

現在の日本語学校の安定した状況は、先人の英知を結集してつくり上げたバス通学を原則とした通学システム、双葉会によるスクールディストリクトとの信頼関係づくり、補習校・全日校における生徒交流、オープンハウスや現地校訪問などでの学校交流、運動会等行事への招待、歴代の国際交流ディレクターによる地域との交流活動、そしてトータル的にはJCCCの幅広い現地教育機関への援助など、多面的・複合的な手立てと積み重ねの結果なのです。

我々は、今までのシカゴ双葉会日本語学校を支えてきた人々が築いてきた現状に甘えることなく、ここアーリントンハイツにおいても、地域社会との協調と相互理解を深めていかななくてはなりません。通学問題だけでなく、様々な面で「校舎を貸してもらっている」「地域に住まわせてもらっている」というある面で謙虚な気持ちを忘れることなく、シカゴ双葉会日本語学校がしっかり現地の方々を受け入れられるように努力していかななくてはなりません。児童生徒として、保護者として、学校として、それぞれの立場でのご協力をよろしくお願いいたします。

具体的には、以下の点に特にご留意ください。

- ・あくまでもバス通学が原則です。自家用車で送迎は、止むを得ない場合のみにしてください。
- ・駐車場に限りがありますので、学校行事等で来校の際には相乗り等でご協力をお願いします。